

シカ分布のさらなる拡大に備えて

森林総合研究所東北支所 堀野眞一

1. はじめに

全国的に分布を拡大しつつあるニホンジカ（以下、シカ）は、関東以西の各地で甚大な農林業被害を発生させるだけでなく、貴重な自然植生に対しても回復困難な影響を与えている。東北地方では、既にシカ被害の慢性化している地域もあるが、これから分布拡大によって被害が広がると予想される地域が多い。後者では、大きな被害が出ないうちから対策を取ることによって被害を最小限に抑えることが望ましいが、シカ害の経験をもたないためにシカへの関心が乏しいのが普通である。そのような実情をふまえ、以下では、まず、シカとはどういう動物なのかを簡単に紹介し、次に、東北における歴史的なシカ分布と、岩手県におけるシカ分布拡大の事例について述べる。

2. カモシカとの区別

東北では、まだシカがほとんどいない地域でも、カモシカが生息していることが多い。そのような地域では、カモシカについてはよく知っており、場合によっては被害も受けているが、シカには馴染みがない、ということが考えられる。そのため、シカ分布拡大の前線部分ではカモシカとの識別に注意する必要がある。慣れないうちは角を見るのが最も確実である。カモシカはオス・メスともに円錐形の短い角（洞角）を持つ。一方、シカはオスのみ枝分かれした細長い角（枝角）を持ち、メスには角がない。ただし、シカは毎年角を落とすので、次の角が伸びるまでの間はオスにも角がない。他の区別点としてはシカの夏毛の白い斑点や、尻部の白い毛などが挙げられる。慣れれば、首の長いシカとずんぐりしたカモシカのシルエットの違いによっても区別できるようになる。

痕跡による区別は難しい。足跡は非常によく似ている。シカの蹄はカモシカより先端が少し細いが、それがわかるほどはっきりした足跡は残りにくい。食痕も酷似する。上あごに歯がなく、板状になった上あごと下の歯で植物をちぎり取るようにする食べ方がシカとカモシカで共通だからである。また、糞の外観も区別が困難である。カモシカはため糞をするので、明らかなため糞の場合に限りカモシカであると判断できるが、カモシカであっても全ての糞をため糞にするわけではない。

もし、現場に毛が残っていれば、手がかりにすることができる。毛の両端を両手で持ち、小さい輪を作るように曲げたとき、柔軟に曲がるのがカモシカ、ポキリと折れるのがシカである。

このように、シカとカモシカとの区別は容易でないことが少なくない。農作物などに被害を受けたとき、加害動物を特定するには、自動カメラを仕掛けるなどの方法をとる必要がある。

3. シカの生態

シカは植物のみを食べる草食動物である。また、反芻獣であって、複雑な構造の胃（反芻胃）を持ち、一度食べた食物を吐き戻して噛みなおす（反芻する）。そのため消化率が良く、利用可能な植物の種類が多い。これらの特徴はカモシカと共通である。

シカがカモシカと異なるのは、群れ生活をするという点である。そのため、縄張りを持って単独生活するカモシカに比べると生息密度が高くなりやすい。また、シカはカモシカに比べて初産齢が低く、しかも、カモシカと異なればほぼ毎年出産することができるため、カモシカより繁殖力が高い。これらのことから、シカは急激に集中的な被害を起こしうる動物である、と言える。

4. シカ分布の過去と未来

東北地方にはシカ分布の大きな空白地帯（全くいないか、または、目撃例があったとしても非常に低密度の地域）がある。これらの地域は冬の環境が厳しく、とくに積雪が深いなどの理由のため生息できない、というわけではない。江戸時代まで遡れば、現在のシカ分布地域より広い範囲で多数のシカが繰り返し捕獲されていたことが記録に残っている。このことから、東北にも当時シカが広く分布していたことがわかる。また、強い捕獲圧のため次第に数が減り、明治に入って各地で地域絶滅したこともわかっている。すなわち、分布空白地帯は最初からあったものではない。また、現在のシカは新天地へ向かって分布を広げているものでもない。むしろ、彼らは分布を「回復」していると表現したほうが適切である。このことから、シカ分布拡大は厳しい環境に阻まれて次第に収まっていくだろう、と期待してはいけないことがわかる。

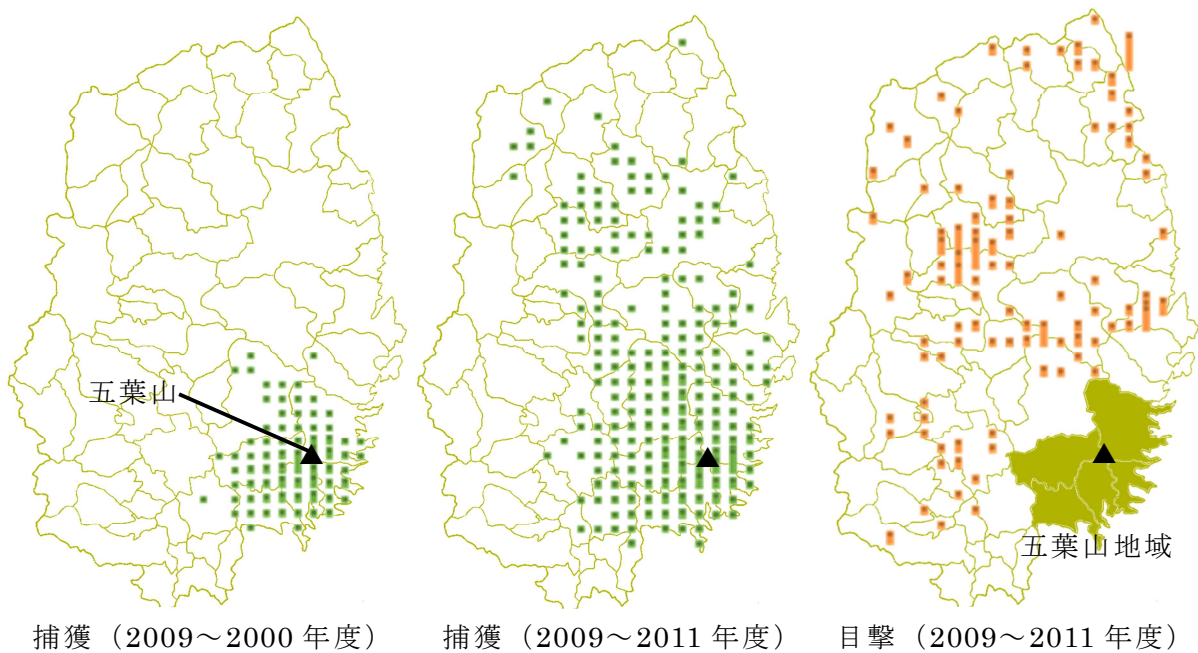
5. 岩手県の事例

岩手県はシカ分布拡大が進行中である。地域別には、長くシカ被害を受け続けているところから、まだシカを見ないところまで、さまざまな段階があり、それぞれで起きていることを観察することができる。そのため、ここではシカ分布拡大の事例として岩手県を取り上げることとした。その実態を明らかにするため、一般狩猟と有害捕獲による捕獲報告（1996年度～2012年度）、および、同県のニホンジカ目撃情報収集ネットワーク等の目撃データを（2008年度～2012年度）を分析した。

捕獲実績は、ほぼ五葉山地区に限られていた 2000 年度頃までの状態から、約 12 年で県の北端や東端近くにまで広がっていた。拡大速度は一定でなく、2002～2004 年にとくに速い動きが見られた。その理由がシカ分布変化そのものにあるのか、シカ猟の体制など別の側面にあるのかは今後の調査を要する。速度は五葉山地域からの方向によっても異なり、北上高地に沿った北向きの動きが最も速かった。方向による違いは地形を理由として概ね説明できると思われる。

目撃情報は、報告された数が地域によって明瞭な濃淡をともなっていた。県北

の沿岸地域では捕獲実績がまだ少ないが、目撃報告は比較的多かった。その反面、



既にシカが多くなっている地域、たとえば遠野市とその周辺からは少なかった。このような特徴は、それぞれの地域でシカ目撃を珍しい出来事と思うかどうかによって生じていると考えられる。目撃情報の集中する地域のひとつは盛岡市であるが、これには、人口密度が高く、目撃例を報告しようとする人が多い、という別のバイアスがかかっていると考えられる。

6. シカへの備え

いよいよ地域にシカ分布が及び、被害が出るようになった場合は対策を講じる必要がある。防除技術にはさまざまな選択肢があるが、残念ながら現時点では、全ての被害地で利用可能な安価で確実なものがなく、いずれも一長一短がある。それらの中から現場の状況に応じて選定し、効果等を確認めながら見直していく、というプロセスが必要である。



造林地を囲む防鹿柵



単木的な防除方法の例

7. 今後に向けて

新たな地域でのシカ害対策備えにはある程度の時間を要する。そのため、シカが増えてしまったから動き出したのでは遅れをとることになる。これからシカが増えると想定される地域では、既に増えてしまった地域で何が起きたのかに目を向けて備えておく必要がある。あわせて、シカ分布の実態を監視していくことも不可欠である。捕獲報告と目撃情報が有効な手段であるが、上で見たように情報の現れ方に違いがあるため、両者を相補的に利用して判断する必要がある。また、目撃情報の提供を呼びかけることは、まだシカについて関心が薄い地域に対し、シカへの警戒心を呼び起こさせる一助ともなる。目撃情報の収集を通じて、行政と地域の間で情報と認識を共有することが強く望まれる。